新版
諺解
本草良土產及合
下

183
3
266

五十一　老松

○[illegible]くらべられとべかりける法師

けりもていそ[illegible]ヲキ寒くも[illegible]ゆひ[illegible]りみ[illegible]め

[illegible]ぬ[illegible]木と尺[illegible]り。いく[illegible]ハ

[illegible]くなり。[illegible]のうち[illegible]り。老松と法師

ぜぬ神[illegible]といでゆそうや

□雅よいく[illegible]や。ひ松を行とゝ[illegible]ぞと[illegible]

ゆ。何ともなぜぬといくで。老松と法師ぞぬハ僻目で

せいふ[illegible]さあり。いく[illegible]風ぞ出してあ[illegible]んとれ

ひていひそゆ。老松と法師ぞあとハ抜くわ[illegible]

△[illegible]芸[illegible]神なり不[illegible]なりいく[illegible]風老松ととん

いまゝ変ぜぬもどもあり。シテの名問ハワキノいふ所
とゝさぐりくいひゝる紙とぐめてもまし老松と
はゝ演ぜぬして俳諧あしといふべくなり。今一度
見ものとして不審しめされい

八十二　通盛

○我をのもしれ人こい恋よもぎまり。通盛ハうれぬ
□難よ女の何ゆゑ。ぢ。みちゆりいふれきひぬを
いかゞ。ゆ。あり
△遠ざ色して上下れ老人よ。我を我親我つま
侍ますても。化よむりくいつよハ早下して
いま拙なり我見慣る者とあがめていたりけと
ゝ。ゆ。ぬ老と。遠ゆの者のいふるゝ。そるゝをこの
ゝりゝゝゝあるべし
○キリ漢通れ変と聞とれハ悪ゐとやゝもをゝ入すく下畧
□難よいくゝ山ゝりの何蓑のとと問るゝ。ゆなりも
何とゝゝれゝるゝあり
△遠ざ山下の弓八幡と放ゝ門との何ひゝゝりとて
難ゝられゝるゝあるてぐりくゝしてゝさゝせん

八十三　芭蕉

○ゝゝゝ衣乃錦ゝを

□雅はいとかゝる衣といふ河ハ和朝乃門ましてそヤ
さるべき人ハ入りたち楚國ハ
いかゝまてのもなくゝ屋衣と入の金是
△迦葉はやとやうさて
ちう衣といとぬ。黄色の住人も黄色ざしと
いめで。京ハ者も京ハ二をあでいきひより。
ゞ〜かくさめといふハ和歌なれば唐歌ましひ
きゝ不すりとのふ
唐書ましてはゝ〜ハ
けゞ〜さらへ
ましい
三蔵の

臺色色經乃すまふ
○小の字ようさまりれ迦葉上者のごと
○雅乃まりと法の
□雅はいとく毒ともよくれどゝあハのハ乃字
このまゝかゝゞ
△迦葉法乃者まのハ乃字ぞあるのふんがうのまし
うゝゞ

文十四　咸陽宮

○ての字たゞきたり。迦葉ゝめれどゝ
○いふ秦陽乃刀と

□鞍はいとくたカカといふるすいぶんしたカの力乃と
いふ名目ハ出ずやう和國乃何ものべし
△逸話唐よりも鈍刀不截骨あどうもりたカとのふれ
目ハ和漢也隨義將用とて音うり色うれども。
義とのりく將じて用ゆるあしひなりたりく唐
音と和漢とをもりてうて和漢の差別ちがあ不義
ごとなり
○今春云帝い色と叡覧あるに寒くうんしば乃ちホ
□鞍よ。ち乃字あ一しゑ無いらんあるふんまび何ゆ
なりたきとみをごとんあ懐あり

△逸話 ちのはあ一しとんちうへごうしたりさみ
あとおし。ふいらんい帝ちあごさり。ぎたくうんしば
とんちうう大臣公卿のうんうゑ父相乃うんやうと
ちうあうたりとうれ倍一蕃にくる者ごそやそも。
叡覧とんるとの国事とうさまへざうべさうたち
経乃文を見るよりへそのごさりてい和とのゲ
ゑ乃みえをさていさりうそあき
○あさまりにとおくよ二あり逸話上のごと
○いふ荊軻秦舞陽をしうふさけふ云ふ人の
居とをりをあよ

□雅よりいとくこゝの人の后とゝ思妹の君乃とゝ申へて
いつもそう。是程あやまりと探くく出さうし徳
此事申まゝ。どうくゆされど。后といふのハ和漢共
よ一人ゝでもなさるゆゑ下畧
△通言いふゆゑ后といつも一人よりぐりこの国ゆゑ。
三千人の后とハ世界の冢峯の国ゆゑ三千人ハ后ハ
別なり。后三千人とゝろゆる俳見のいとゝあく
又妃后之前皆称妃周始立后とあれとも曲礼ハ
也天子之妃曰后とあり。どうくゆゑ也とハ
何ゆゑよりぐすゆゑものあり。三千人乃妃といふ中

ゆゑ后も女をあるなり。寂意一と初て十と
ちゝぬ批判もちゝつもあくぬものあり
○月乃おれちゝ八夜をとけぐる姿風雲ゆゑて
まろかり金ことぐよれつる姿くも原の雲れ音
□雅よ是和勢ゆて世殿楽乃せうぐあり。雲井ゆて
ゆう金ことぐふなけるこゑくとゆげよん
秦乃代ゆてハせうぐもちぐひこゑ物ゆん
△通言ゆゑとゝれゆゑ金の下よゆゑ字
入いぐとゝのお意とゝぐあゝ原ゆ高ゆゑの
せうぐハさて意猶ゆとゝ何よも梅ゆ指子ゆる花

の袖はそれはあのやうに上下と畳してみると
ぬきて使くと合さるくぬをくぬきを
○あるとき乃ちむの下はその字うさ書らめれど
又十又　錦木
○色八錦木とてをどりかざれるまなりいづまもく
南下の名物くをくはめされしく
□雑はいとくさてもく紙乃ちれ物ちりる。山紙
きの人をバをくやされこもりぶさぶをを
法西一見乃俳りまんやをあはつはあはてを雑
謝とてとる物をれは世様人は物をくといふすぶ高

△逸景世とくさくさる高なり。知家はつい物とく
ぬ物ぶ又お家はあさあひせぬりのぶ人乃雑謝し
ぶかりて物をうねだそうぬとをうぬぶ錦
木も南下乃名物じや程はめされといはる程
ぶぶぶざりて施さべそれい名別のを
あるくくくくれ雑同なり
○就世云ひ錦木や細布乃ちうめさぬいとりを
□雑はいとくひれの字はいはる。をの字うべさ和あり
△逸景を程又南はてくを猪はあをんとう
ぶんいもをれはあ。今ひ細布れをうと

乃の字を入るゝ布れ白さよいひけらる抱あり
知しめ次の一偏を乃てをの字をうべさあるりと
出しいなるべしいやくやうゆさ事也
○て乃字をまり逸芸よ事のごと

五十六　字ふ

○それ小ひ養笠くるて山れと係へ
□雅よ獵所乃遊灵の出家抱とたのひとて辛情
のことだなり
△逸芸を文係れ字義をあ思味あり渇係て
あさ敬るるべれをハ先伝の者乃方へ早下
のことだ係れ出家よ何とを辛情よ何
○ヒ芸よ小ハ乃られくや
□雅小行くよ海あるとい係ぎさよやあ
△逸芸上巻よ迷子ごとくやあ七乃やと
あひめられをべけや一ぶんりとけるべ
一ものなり
○今まで乃し姫小松乃とへるぱあ小をとへる
何ぐぱあ女あるい姫小松知べし男あ元味遊
△逸芸いあをとるよ孤とをとりて山る逸姫とへべ
男よワ一なぐ月をせりて雅どるあ

ぞ拙といふをすまぬぞ。拙なる性情也。よい有情なり。
何を有情と性情とは、こんやあぐ〻とてとのるよ
うれ〻べたるべし。それ〻は主者肩情なりの乃。
無弱雅といふのく。無性ひの乃男女人とて
ぢて無度面めく〻るべきことのあり
○ふのほ乃はぐさのるす逸芸てあのごと
○眼とたんでもむくとさりぐんとんめ。もむ
をさくとよいひひあるべれど。寝ようてもいひ
うけもあく
△逸芸あしとづりうて何るる細みうてあり

しといふるあし。ちあさまんちをぐんといかあ
ゆをぬはせりさあて。れりしとねるあり。
代逸芸をもべさ面りの。ぬめのたぐさ乃
あしとんぬぜよくと彩くでは逸芸るす

五十七　海士

逸雅よりあくねとの乃審。逸芸人序は垢とみ
○房詩乃大臣とん我ちすりり
□雅よ有せれうよ大臣あは任ぜ彩彩
△逸芸書ちく乃ほそ其人乃美とあげてふを
うとぬされども贈大臣もたれ人を大臣と

しかへしありさまれども。夢にて好き改大長を給ふ
とりめれば。房清れ宮とよつ限り
○我位里とりにうなどいやしく紀国会の果ふ梅ざ
やきれ上人をアるめ百里とゆへ
□雅よ歌ともむ里とりみとりの河いりぬるすくぞ上ふ
のかさりて出るくしぷ。又雲乃上人を尺るどゆ
をれど。はぐさ有しし
△遥に我位里れ河いるぬといふ河さりとて人を多福
ちとど。又ふの字乃かさ有り遥に見てあれこり。
見るめ花ぐさ形ふ。有りさとふゆゆいと出り

て酒よ雅とうつものぐ。いまぐく梅ちんのそやり
乃へちぬう
○欲世云むりをさるた先ちる。明珠とゆ仲すて
雅宮へちれしを
□雅よいくく毒流とをよあし平年も百年
ををとふる紙さるあ仍ちり
△遥に見て形さ乃乃笑れぐくさけ人を乃むり
なりとしよ年すてをむる
○今云よ天智百里れ帰付とゆりり。かくいへど
房清乃父をむりよ大臣冠よ地ちつちり

たゝ〳〵ば房州とゝまよへいで

△延喜ひろまんとゝまつりて勝とゝゆる
ゆゝしき恐て用和乃禅行百歳わりてを山都の
ゆゝ山わらあまどもそれハわとのゆゝの月よ尺四寸
ゝでハりのへよ。ひ陰よ寸ゝ出されゝ所ゝ不
思議とゝまわりけり。孫ゝくハ山やうゝ寸ゝん
とゝゆゝゝゆゝゝどとゝもぜりてとひゝあゝべ
そゝさゝ乃ゝゝゝ寸ゝ寸ゝ。ひ山ゝゝを大乃歳よ歳
とゝゝせハのそゝひゝゝゝ。ゝゝ不ゝ秘密伝授不
なり。ひ伝ゝでハ山ゝ寸ゝれべゝを師の弟乃

指ゝ云ゝ程ゆそゝうくれゝねゝゆへさぬゝりゝくゝ
ゝべ返言よつまりゝゝゝれゝゝゝべ。ひらく
それも義鬼乃了首なり。大日本国中大小の神
祇の鳴動ようゆて。ひ更お義乃業ゝゝ陰れ函
ゝこをゝり。そで見そゝゝ尺出されゝゝが出しく
ゝまゝ寺吳乃ゝそゝねゝ秘事ハまつぎゝれども
合点がまゝりまハ

○とゝ大ゝゝ親世目ゝ中よ釈迦ゝ像ゝ函
をひゝゝゝまりれゝゝを出ゝ出ゝゝゝ不
ゝくゝれりてをひゝよそむゝでゝとゝて面向不背

のゐとゝい

□雅よさてもくさての間ぢくり。まづてゐくゝ乃字ゐゆさ
ゐりくりゆゑつてをもりとやりくゝゐいゐゐ曼さゆ
ゐりゆゑゆてをとをの字を入ゐくゝへ。向風石雅
とくゝゐばくゝ角まぢゆゑくゝ点まで雲れと人り
とゝゆるもゆゝくゐゆよゐくゝぢや

△遊言ぢゐよてゐくゝのくゝゐりへ上のぢゝゆよ
りてものくさくゝ。くゝをハくゝのくゝぢよゐくゝ。をの
字を入ゐゆ。和漢よりゐんゐ角へを乃字をと入ねべきこ
えゐ雲れべをの字入くゝゐくゝ。雲れと人とくゝゆ

ゐへゆくゝくゝゆよりくゝぢ。まづこ点ゆてゐんくりねん
いゐゐとゐりくりいてへゐづくゝの雲のと人ゐてを合
点せゐくゝぢゝをゐくゝの点ゐへゐんといゐゐへゆりてと
いゐゐゐゐゐぢり。ゐくゝと字ゐもゐくゝゐゐ字れゐよ
くゝくゝくゝゐゐ字ゐくゝとれゐくゝくゝゐくゝゐくゝ。
ゐんくゝゐゐ点の字ゐ。ゐくゝくゝゐゐゐ点れ字を。石をゐ
をゐれへゐんくゝくゝくゝゐゐて字ゐのくゝをくゝさゐね
ぢ文字ゐくゝ字人ゐぢ。ゐへゐりのゐひくゝくゝり
一度くゝれをくゝりゐくゝ。くゝ点をれと人ゐを
ゆくゝを。ゐくゝゐゐへぢれくゝゐを世よ。文育石通の

おんなゝり

□雑に淡海公とん遊蜉なりとてはなきにて淡
海公といふ人の名をうしなはれけし

△返答はたゞめれ大臣の遊蜉と称すなりと名
乗らるとおもへども前なり。是女は図中説者の評とぞ

○その影の躍をとりゐつまゞし此玉を取得るゝ
此縄をとうごりもなし

□雑に龍宮城の龍よりとて此時は此縄に海
ちゞまてかとりくまじとさるべく又三十丈の玉櫃乃内
次人は此縄もや海になりて雑物をべし。又書の八

龍魚宮木縄管おりしうべし此男へうつゝをあまぐき
よどく名誉なる海士となるは珠をとれてうら腹
とうさやぶりに足なくえて力もあるまじよ龍宮
よりよく縄をとうごうし。此男へ出てへるうり
あがる指は寄し所へは大阪行田とは此が思案に
てもなるまじきことなり

△返答 龍宮の龍よりもとくへいとどくまじき
うといさそくわざまし此海すこし斯り。扨との
まへ此の影とあるとは、両影づ。十合せしるの影
とおもられての不案あるべし。少しひやく。思ど

て数乃満といふハ天竺にてハ七つを数の満とし
大唐日本にてハ十を満とするぞ。けてうをかぞざり
を志れぬるを無量といへど。無量にも有量あり
有量にも無量ありて。たとへバ雨のふるかずハかずしらざり
も志れざるゆへにかんぶのまなこにハ無量なりと
いへども仏乃たんいにハいく粒降るといふをかぞへ
しりたまふゆへ仏の目にハ有量也。凡夫乃目
よりハ無量なり。これハ喩也。くはしくせんさくなけ
あれにて千万といふもそれなくの推量の百万で
十代るまでハなし。八千万にても万万にても無量の

廣とはいひて千万といふてものぞ。書にも百千乃
雷などいふことも百とふとはかぎりしる咎り
あらはさいくれども志れぬ事を百の字にとひいる
物たり。千万にてもそうずハひつそくまんなどの
不審どもこれをとわりてみて返答するもいと
をかし。面目なし　次にをやまふなんの恐臭が
答えきんの何囲がかくられなどいふ不審なるべ
乃たぐふれいふに破らり。いふもうれしくぞう
くめい慮なるあまりとなじらまてぬれからう
ある愚昧乃ものにハ合点のゆかぬ物とたりかてきぞ

あきれてづりおぬをぬ世上般若よりたり
ちりの名誉あれどもこれもるいそのごとくさの
ちちうい悔をこまてハ為合点きまいの屋づく
不思議物語とふ物ゝ出るゆゑんそれとりてまき
氣をなりめれよ

○秋乳のありとは強んぜよとあるばかを紙れあり
きなかとあを

□雅よりあり

遊客らめれどゝ

○さてハ三毎乃手紙ゝ。ゆくさてりんまべ紙に上り
ちつくゝ十三を鬢をかゆよ埋む 下畏

□雅より由霊なりとてもはとみくいるりいひまと
せめ。絶文をあとい奥のさあゝ屋事くい屋さと
いひ女の分とて物ゝ狐れの狐くゝ見れりや狐理
乃ちとざるを世よ。見ハ屋とゝ町ずと房汚屋
をなりひのゝざさるりあり

△遊客 絶文出ゝるふいるふ奥さ屋れるゝ。いる
みをうとてあるもゝ。ぱりていりハ袍拠乃
きあゝ。屋文袍をくゝふをるゝそよ
くれ。ちくあまれ女乃ゝれ文袍くべきりゝ
やとゝ。ぞれるの文育ゝ屋ての俳ゝ。狐理ゝん

ものさびしくて色こそ
三十三天乃ものまで帝釈天の。畑ををしへ狐
をわりうるへ人ゝ男のはつる業を梅ゝ木の程を
何のぞ。高野も高野ゆゝ人を人同ようして。
鳥のぐもものさびしわりぬ。屋うゝ雑四と房湯
屋ゝさのひのぞ。帝釈天乃師と乳る狐をあるゝ。
ものくも知れる人同色世のあるとひのべるし

廿八 望月

○七ようい屋いのとう使むぐさぞ。られ安田の兵衛
茂作乃作ものゝ。

□雑ようとしとを入るゝ何のぞや。光しのゝ
物ゝてんのさゝ。ものなどゝ物ゝと入を
ゝれのゝ入をうゝび

△逸美のやうのゝ入べゝどいうゆゝるぞ
作ものゝ。ゝれてゝうとゝぞ

○ゝ頃憲逸ゝゝされては

□雑ゝ逸ゝゝされてゝいゝ色ゝ何ゝ

△逸美中作ものゝぞ。ゝを。ゝ
ゝ。ゝ。被ゝ下ゝ。ゝ

親より廉直強梁なる字なぞや夢ふけるとたるべし
よそしくて見ぬ人ありぬ。あれはあるこゝにまゐりてきたりく
ものとゝいとく文字をぬぎへられよ

文十九　書発

○我兄弟宣旨をもて来さん人てまいりたるとの勅宣を強せ
□雅は我兄の宣旨をもていふ云云なり。勅宣
とゝいふものくゝりしていねるものぞ
△無言勅宣を代くれ勅宣くわり。家君の勅宣れ
しふしては異してはあはせぬるはなし。
事はぬさるるべしとれりなべし

○親なの民ずてゐ人
□雅は親なは親なの考なとてとゝせてみい
ぎうなりぬとゝいれとにへのなはのなぞや
△無言とはあくとあてぐうて。秋色も養哉養哉
乳なと人焉痩哉人焉痩哉と問ぐるへして
速らまてとゝ文法なり。親なをとゝかも問なとゝ
ぐくあはりてくへいくしびいてぐう
○今言は日吏り門のあぐれはぬぐてあるもの
はあるべ
□雅は長歌なとゝの紀の文やはいるのはれる入

をしてかれは入木なりハよむ

○観世にとゞまるものゝ好みにあらじ。されバよろしからぬ

ことゝハ何ごとんでわけむとんで

□雜は方丸にへだてしようらうをわり。亡霊の

うしろ五か命の事ふかき何のあやまり。観世は二

名の痛病(そまう)ありとおもふべし

△返答はこゝろにひとつ二八のうち。観世は二名か八ばまへの

ほしげなれのすよそれとけあそらじめか

られし返答れはしく文字と異せるもあり。

全文(ぜんぶん)ひくもあり。ちくはし古歌をよむもワが何かよもく

ありうちの引けれ柳に梅しはあめの露さへやうにまで

家ゆへに増減(ぞうげん)してうしなふの心。去れバ一字ましる

もあり一字ぬきてうけもあるぞ。窮屈(きうくつ)なものう

さいふに苦(く)しけりたかゝる

○勅使とうとして塩浜(えんえん)してみ奇特(きどく)にあらずして

□雜まての字かさなりけり　返答らじめのごとし

六十　楊貴妃

○その秋の七月に牽牛二星(じせい)よりつかれしその縁にも

□雜よもの字をこれバかりそれいひすての餘ゆゑ

△返答はそれ字にしてその命なき。細(よわき)の縷(ちぎり)のうへとけ

よ初稚の七月栗の云れ栗をぬくことちひ栗れ
とのぬぐへなりぬもの多くもの人よ玄家を首老
けるを爲うめ

○神うちみれる公ちるやうく

□鈴よ源氏の方ととりこ何何ぬ毛ぬ子やと
いふぬぬゆきさぬぬ花りうぬ

△逸言節ぬうぬぬとへぬ方ぬぬはりうう
ぬりのくぬれさの方ぬまぬ助子のしれよへの
事也ぬうくやくはぬやくなりぬ公りうぬと
いふ何を知ぬてうぬもせぬて何たとうを

六十一　橋月

いふ月かの程安おとこの家里まいぬくれ人ぬ
ニテ先へ遣ぬくし此者まてんとぬて行くよ程人
のうぬとこさけば梅ぬぬ人ぬれぬもつうの
人方ぬんと為ぬを行うぬ人ぬ

△逸言知ぬてまづ乳遣のうぬ人まうんせぬ相
なりぬてとぬぬよ行くしれのうとうを。
程人方れぬうぬぬ何ぬこさけぬ行し
の為やんとうまうすうぬこの公をく
うへてそぬひうりあるゆへり

狂乱人のいつるは、百姓をもとがひてあるが如くに
ひくらうとするぞ

□雅よ過じて狂乱のよりれるを引合もまた
もとよりが母なりといふもそこそこ引合もれば煩ふい
ひよ我母といふめよ師匠の通りの乱髪よりは
絶えぜといふもそこのいでしなるぞ

△過去これ又傾屋なるあるべく大ごと狂人のは
なしてはいかとはなしてそれはひよりと引合もも
あるべしのようにさいごくまるうるべさ

言のあり。なせよりてこいどふおりやるぞ

六十二　焼搔

○上京に見はみられく信濃のあがりまして。秋は狂
もこやこのあがり。洛陽の名所一見してひと
もとより山陸奥より義光寺よりの焼搔
じれりよあひてひがくよりけのり及ひより焼搔
のあがり月をなどめがやとおひひ

□雅よひんがり俊よりぬすとおがくとひひで
ものもり。洛陽の名所もいくもの陸奥もいくど
義光るいくど。寂竟月をんとひるのけくと

妖怪山よりめぐりしとはこの因果早也

△善悪何をもつて沢とは何するぞ、その根よ於ては
てまへ〳〵の姥がこゝろの有さまの嗣めをしてさる
こゝろ沢山あり、又一切萬物に縁をもちて成る所もあれ
てなるもんじとこいふは、一切萬有一物一萬より
物くなる理屈もあり。されば、それの一つも萬物が一萬
まへ〳〵、善悪ともにあるとゝりしぬまでぞし

六十三　熊坂

○出離生死をこそねがふべけれ

□非よ唯生死の在ところなきにあらずといふべきとへり

△出離の字をさとりといふはいかゞなるとおぼへらる
さるかは寄特なるべし。すべて菩提といふ名目のごとし
菩薩は梵語の略也。漢語に道心と翻じて菩薩
とは覚有情といふなれども、菩薩といふ又菩
提といふなどいふも、菩提の名といふぞ。出離生死を
さとりといふも同じ義なり。出離と見れば
離るれば本のとゞまるといふまでもなきなど
なくといふは偏におもへ行じがたき事の身のうへの
ことめぞなまのきりが門よりすゝむといふべき

○観世目山賊夜盗の盗人ホ

□夜盗と盗人とハ。別のものなるよさなる

△世ニ云ヘル餓鬼畜生乃ち六道輪廻とハ

文ハ餓鬼と畜生と六道とハ別のやうなれ

ども六道の義ハ別にあらず。六道といふなる何

ともさりもどもこれも地獄の業者の居て山獄

海獄追剥辻切夜盗盗人巾着切押込強盗

下の盗れなまて等ハ。たゞうてゆで盗のひろ。

別ハ人ごゝの差万別の次一人なり。別の者とこゝハ。

猶平なり

○てのなるたゞ　世ニ云ヘル　誰ありしを

ものの名義と世ニ上ハ是れ　ものゝ名ハ

六十二　道明寺

○難ハ人ゝとさと。ゝとりを所ハ乃ハ

ありり　世ニ上とみハ

シテ　抜ちいやとも　ぬ　抜ち　俊ハ

□難ハいやともいふ　ゝ何ゝ　ゝ　ゝ

ゝとも　ゝ　ゝ　ゝ

なるまひとハ世ニ。　ゝ　ゝ

ゝとも　ゝ　ゝ　ゝ

△世ニ釈世乃時ともいふ。

同じこゝろのりさゝ別なるべし取捨
よもさゞく用いよいづれとゝいそれば
○かゝうゝさいぐ
□雅よ僧百樂といふこゝひ相乃無なりかゝへ
さいぐゝの間乃ゝれ頭別なりこゝさいぐ
と使ぐさゝ八何ゝ少そ
△逸言無仮よ山徹来無乃無人おとゝ同じ
ゝゝなりさいぐゝ無ゝ別なり

六十五　自樂天

□雅よいゝく樂天来朝ゝ為ゝ人ゝ事ゝ
△逸言は辞推来なり。何を隠拠よりとゝぐで
ゝゝなりどゝ人をゝゝとれゝ書ゝ人
天暦六年十月十八日江相公菅原朝臣文章
和天宜天長九年来朝とあどゝなりゝ人れにゝ
を仕ゝうゝれどゝそゝもゝゝとゝ
○唐人なればおゝぐゝゝとそゝ
□雅よゝゝ何ゝ唐人れ孫ゝゝ

よも楽天と海嶽との問答あるふくいとて拙ク組
通事ありや。通事ハ彩くてハ事を出えず
△西芸乃もとゞれ住芸れ神。漢の河をはりけるほど
さう。彩推ハ合長しておんやもぞてハ海嶽を
身と変じ玉へよ。さてわすれ玉ありそだされた
る。西ハ何を入りでいあ。かゝることこさて
あをんとすきびいりしやとふすてさこへうん
○孝経天皇御字うとよ
△雅ようゆうよいへで示天求釣れ嶽すれを求ハも
さうこ御ふうなり

△西芸ちをこされハいのむりあり。又漢氏ようゞ
を乃御時ふうとうさ。伊勢物ゞりあむりとうた
ゞせうゝ尚書序ハを古伏犠氏れとあゝうりちう
さうをゆゞと久ゝさやうよすあせうゞ又法ゝ
れゞゞへゝ者めされ
□雅ようゝく海青をゝうきあ。青海波るゞ
△西芸海まをゝすを英人諸河乃楽なりとある俗へ
乃ゝせゝなり

○海青楽

六十六、忠度

○今表アヒノウタヒ嵐そげゝれう郎

□雑よ世間家ぞくさとい家ぞうう
△過言ぞうう〜ねとあぜまでぱく〜ゐ
○新過（アヒウタヒ）ての字ぬさかりとり。接寝（うびね）梅ぞうかゐ
ぞや。昔ぞこ見とあ浦風のをとうすごさあ秋乃
ゐ。昔ぞ見て昔（のどう）ぞうかてあぐ〜いあ面ぞうぬさと
ぞ〜後ぞぐ〜ぞ面ぞうゐ形り
△過言て乃字ぞさあり接震あ河乃ゐ。倒（はか）く
上昔のぐ〜ぞすぐ見といふぞと縁ようぐりぞ面
あぞあ〜ぞ掛かぐぞ〜さんぐ〜とぞ。
昔ぞぞぐ見ぞ〜ふ雑〜すぐさあ秋とた

ふかたぐぐ月ぞぐさなぐあをもいぞぐいあぐぞぞ。
とく〜ぬを偏（へん）よりまゆうかあぐ〜ず
○面意氏字のぐりゆたんあよ
□雑よ仁乃字三川うぞ〜ぞ面ぞうゐぞや
△過言ぞぐあ氏ぐ〜。源氏伊勢物語狭（さぐ）乃てあ
ぬさ形りあぐゐゆ。ぞ昔をよ仁ぞさ仁ぞ〜出ぞり
○脂（あぶら）とぬれば梅ぐぞやれ。短冊（たんざく）とつぞぞまぞり
□雑よいぐ〜ぞぞやぞも。出度（でど）れ時代（じだい）よぐんぐ〜ぞ
ぐぐさぞや。此強をぞあれぞり人。短冊といかりの上（うへ）た
ぞりあぐぬとあり人ゐるぞや。いとぞおうぞたるん

△無言太子とあれどもやてきるせんなり。天武天
皇白鳳二年芙蓉の岳に地乃ぬし佛のゐるあり。
おしまでハ一千十四年さ几の事しぞれよりほよ
ひさんざくハちゞまりきてしずにへと曲家にも子細
あれとも師傳之口決ある人ハおしつかやかし。
まづ右歳より三一百年されよりある細と合点
しめされてがよし。上古にハかゝしとりぞ詠さの
言葉もそおうしられ。とくとおしひぬくハ堪能
家に問てこゞらをおかへるべきこともあり

六十七 家女

○あきのみかどのよ守よげにさもこそ孫くされ發ど
さる沢の池乃むかしみるぞうれしさとよめる也
あゝとお志うめされはかずや

□雅よ帝の御製と吟ずるとて、あの方乃えんとぞ
とハれるうりおわてさ訓む此哥ハ拾遺よ入く作者
柿本人麿とまた門の御製とハなし

△無言よある本の哥ハ彼乃哥あり。さとらしき作者て
だるてもとし此のにはよ雨しめりをいふかんとも
てり。なを字義ときゝぞ。俗説を證としてはあり
まていひこれぬ無意なり。さらにあめの帝の猿沢

の池をほりしかりてさこがを藻うげうめぞひ
れまりとうみのひとの所をとのぞさて人丸の
をれ製のごとくうりかりるるよ海をれ義あり
とよ海ゐるといひてうるなどいひうハ
あ海首尾うし今一思業してとゐせべ洞れと
て明白なり

○池乃波うれ汀よ産とるして

□雑ようるといふ波よして池乃波とをうハさ
えうりうれ汀といふ産ぐさがあるあり

△無言ぐめよ和ゐうかまり産れ業ゐして
ひ歌のわ裏をとうさ歩ア〜るごと

六十八　関寺小町

○衣通姫とハ允恭天皇れ后ゐて御まし
□雑よ允恭天皇の后ハ母仮大中姫とア也安康天
皇乃母后なり。衣通姫ゐ妹ゐて允恭の妃とな
ものゐり。大中姫流れ後立后れるつるもも
△無言皇后れ妹衣依郎姫義ゐて国色ゐり。天皇后
て入之宮ゐ長殿ゐ姫ゐる基。これゐ恋ぐりく
別ゐ宮と大和ゐ造り。衣通姫と安ちぐくこれゐ
幸除ととゐ。御ゐれ義とたのりて二三義とゐ

らんゆへ立后ありしかは知恵人ざれども后にいそんよ暗愚祀
あれども天子義をもつて曲礼の文
乃ちおのく妃と后と別あるべし又羅世の色よ絡して
世りもつて后と称せらるもまた宜なり

□羅よ此の字よりの事

六十九　与紀居士

遊義物語

○ひとりの字をもつてみくあしく今去よ流法の場を
作まされる根ひよりよりいりそもそもし
△遊義　此の乳例して此の上
○新世りなりけども新づが出でこと

□羅よ新づがの乃字はいやしく卑小なのもと后は
△遊義の乃字はいやしくこれ行ひなるべけなくも
后づが代とつもいやしきさう。世れ哥人のおりくが
の字をもつて自ら代れ老の口乃ひろさよといる。
貴族は后づが代とづの字をつくむ方のみをもはを
ら是しりあるいはそれやづれ字よりやしくと羅せど。
あるゆる奇を羅ぜられあるべしあるべし。
○小袖をめされうへもはそんもひまず
□羅よいう小袖をえばしてはそんを元早也
△遊義孔よも猿蓋れ神をこれを知りを知りへり

猿といふよはまるこのつまをやうがあるとぞもつどの
などをいとをしみ猿とらへ方れ猿屋とんようを
らかうより元早ふさこうあるをぞくりあり
○居士といふくよなるべてたちとあるへうとゆる
□雑よ和とあるへうとゆる何をぞや事
△迦葉和とゆうまやうさと何あり。ちまづり
雑せるへいぶ。和尊より遠ざる。四部和
あど法出よおづ。そぞしくるべとあるへうとゆ
うとゆふんう

七十　波馬天狗

○義経屋屋とおりとして張良屋とゆぞり
□雑よ方梅ゆいをどとも
△迦葉中ちへば梅乃花と一枝をおりて山梅の花を
とどものうをゆ文法ぞ。ちぬとてうて
ゆうぞ。ぞくそのへ中花ゆうゆをとうくとぞめ
らうへとたゆへぞ家めを雑せるゆあるぞ。
門の法製とゆうゆあるうれうぞ製を
をゆくぞ帝乃法寺とゆさこゆうとぞ門と上
みとうくうれをゆ。ぞ山方れ猿屋猿人丸と
ゆれる。猿とゆをどとも山寺人丸ゆうう。

ゑひとくんたるべし。みるとものびハ登ちん
ゆるるなりし。此ほんの事ハ皇統の義よりあるべきなれども。
仰ともなりてみるひ出しうるれどうあり作り
○師匠や傍をとけ賞賜ハ敬ハいうゆを大事とおきとた
人て平氣とうんとなりがーめとうや。師匠のかどしゆ
□難りうをとてゆとうがーぢひなり
△逸言はゆ人ゆと義理ようをとられべでゆとうがーぢ
ゆめーの用ゑでゆとうがーぢひなり
○見までなりやゆいうーゆやて立ゆれど
□難ようられまでなりやとこのゆをとゆとうとうし

△逸言入てをへゑてもさこゆゆなりこのゆをいう
どていさうんゆよきうりうーびむるれども
□難ようし大天狗半ゆれ新聞をうるれど後をもと
紙紙てをうれうーび新朝とゆ和なりしとし和
賜ようよ。其後も不祥ゆもあひうゆ。天下の
をうしゆーよいう紙てうーびしれ一云をうゆ
ゑうれ。天狗ようんうてゆとうし
△逸答天狗いうゆ。ゆ後ありうとても義理の將軍
うるべうし猫をうれでゆーぬーづゆ。ずでよ三男独る
乃釈迦。十方ゆをと一ようれどーれーづりうてゆ。

善とをしへ成仏とときをせしめ給へども。佛力を業力に勝どとして已に無量よりこの地獄に落ちるものの為なり。されば佛のとがめをばかりそ人天物を生者は地獄に堕ぶ力をとゆるすなり。

仏法中に三明六通の佛きゝ給へいらんや

紀の天物づきの行として業力と博ぜんや。天物

きゝ給へ。いかに物を善ば何なるものとなりしてく

きもつぐや

七十一　龍田

○邪のみまへに通夜として有ける者とまくむして

神をそこしに梅しめりの

□雖よりの何為業の為の現形とあり

因ものずくとあるいかんとなるべくなる。

佛ものとうべきそこつる者とまくんともいつべれ。

何ともなく法厳よりせるよりこつる者と押付

てつつめり

△無答押つきて者とまくんといそれまづれとを

何ものぞ世中を清水へまりくに通夜とる

ものおはし。清水に観者れ通夜とせよとれり野

ら生ぜんとしひよいやなともおかせいたるい
それどもとやたるへ押うをその先をまつ孫びひ
あるゆへとわがせよあり一つるとハは祈うんなぎと
なつてぱ感よいて野の狂の寺猫へ一ぱ歩へば
をよ通夜せんよなんぞ先ぎうん

○禅上兼祥くと □雖よひとの字の裏へ

△無答自然よいふるべむともいそんがもてハ地の
うとふ不思ぴちの字なるそ拒ふ申くはぞかひ
とれ字よとがなれふるれがりど拒よのうう
ぬうふうり

七十二 八鳩

○今義よ月を南の海ふやとふ拒の沖をもし
用意ハ狂ふとい和ふう

△無答なりとふうあるきとふぞとふふん
うぞいうやうすふ合点ゆねとふんうぞ。
思して意ハわどにるてもぞ沖ふてもぞ弱る
多ハ家気りうひまてもうを思ぞぬハ愚歩生る
ふ智ちんなり

○沖馬と汗よ和ふ世のへど 下畏

□雖よそのはぞけちり △無答ふれどし

○むかしとかく面白からしも
□難よ世かしとかくられどころをとりつぐさいはいぐ
しらぬるかや
△返答そのこの序の詞よて返答しらゆ初めとし

七十三　野ゝ之

○釈世よ云紀元を後ハ此事絶ぬれ共長月七日乃
くれまく
□難よいふく紀とも絶ぬれぞはづかし
△返答そうじかのおかとしとのとまのおとをしきそおくの文
なりと存ましとのやかしや再勤の猿合してハ
よろしかるべし他人の了簡よハちらしくだ
○うけしがをら是なれ身ぞとくとくせめへ金
□難よひきらせハどかつひのへやといふあれどもひひ
うけよそハさらず心をかゝ置うよておかしかし
△返答すぞ身かれ身ぞとくとくせめへといふかぞづ心
とかやうなことハぞてくらしれまなことなり㕝
よいひうけ寺ゆなさと身をぞけるる身と見へるかぐ
何財もあれみぞとしとく貧あへとハきかしひめへや
といふすとおかへらるへし

七十四　手手

○観世曰これも私にわし候へ共親々より代々伝(でん)して
□雅よ出て代々相続(えんえい)なり然るところ猿楽(ゑらく)座の代
伝とかいふが出来るゆへ千寿(じゆ)の前がはより朝よ
まどといふ
△延喜おゝのもやごとく秋王よ彦根とはきてお
いろねとのぞみ人ふようりて至る度を付ふへ家具
同家のなゐあいてよおしでハ情をぬりのくよく於
がへて己ゝつれまかみ謙退(えんえい)の義を志て日本のハ道
○観世曰唯今ハ何代となりましておそらく何ちよ
てもわまゝよの対面(えいめん)ハ叶(かなふ)まじくたとやゆへ
□雅よやゆへた家具よいふ相之老ぷ実(ぢげ)むしハ三位
中ね為れとも因人(めしうど)の身ともひ孫よ家茂尚(ひさなお)時於
までお人されハおまおいさつもあるべき示あり
△延喜までひら家茂あどよおゝれ加藤(うぐん)の相之弟時
おづかりさる人おれハなどして叶まじきよふやて
下されよかぐくわしくぞんざうしけるの也やゆへとれ
けてくくぢんゝるのなり
○今まよ何とも千年代之前曜とハ何乃為けぞよく
何の為なりともどうかの対面(えいめん)を叶ふまじいよし
といひて皆々へしゆく

□雑よしの河のしきやのごとくにて何とも手れなし。唯今いかの落ひぞとへ。ふよはのその河のごとくにて。そこ波の野
外よりいつ河のごとし

△夜食をとへばそんぎよそれ食乃れ人無とちとせんよ。
そんぎよそれ今何のあぞといつまいとものうしじ
を者よわくねば其者れとばいとねのうおぬしの
ふそんぎのいしきやえど

○ひまをとられてとわしひくぺ蓋乃遠凡れ
ひとうふ。花のやとんよとづるづるえん

□雑よ家れとじ傳をひとの法へふよ独
出るやうよさらふ。ひろかをれ法へあるとふまれを
ふしつねをりあるぶ多記事し

△夜長くづるづるといつよりてらじめて出るやう
よさこゆかといつすうぺ。ひとうふ出るうふ形とづる
ぬものをりうまをとげひとをりひあるゆへあり。後の
れ朝乃兵ハいとぐるぬものとて行。千まぐ
くづるもも

○又行もとぐも又命よりう伝像とかうしう人稚
をとちし祝面れ羅をとうす

□雑よしの河ハ新をくりぐの無道とせぬ名のりつまを

父のおかりをまてこゝひとのいひけるや

△無答父命といふこゝは我身のいひをきの命をも
はてゝ不便なり只今うりかへなりひとれば
ねよりたゝんねてこそしうどさけおそふもの
ごとしとぞ思ふ只今下れ白ひろうを追
ていとれくるひさみまでい者に死ぬんとおもひざり
うりとのちゝとはらまうり。産中みをそれこの
命うをの者ぬ海これはりうとそぬう
づさめりてうど今父命といふさわぐ。郡司れ
いひをけうと只今と同し御見とおもひてひう

ん第して服をうぶ

七十五　橘舟慶

○新世界ふるし　とゝ面白の言ひたやれそぐう
うたをの河ふ波も思ひ白なみれの部の花乃
色ふ條のちし板と

□雖ふ波も思ひ白板とふ行ふ身ぞやそゝ多白の
花乃色をひて五葉とはぐくはやそれ花乃
宿といねば五葉とはさんどひふ

△無言まつぐあふ波も思ひ白板とつふ身金白
まてぬし。白の白勇を花うあしぬう波れよもるう

とのこゝろは花をたづぬる源氏よりの哥にこそ今は
見ざりし夕がほの花と思ふに咲とは浅のむらさき白源氏と
みえてその後おもしろし。さし源氏といふ字なる
おほくのすぐそれはちがふあふ延しはんよ次よ夕
がほの事とひてあの五条にばかりあとかさく
よひられなりしさくへはしおづまれたるこそ名也
と見てありとも此の又条にありとおもひしてく
ばきんよつかとふのをしいらんや此又条の
ちしれはゆかり。花といへるねばいはでぞやされど
とはちらは右節なるをのぞんなり

七十六　三井寺

○かくてこの物ぐるひも末ちくへ。親子のちぎりはなさず
も。菊兒の家となりかはり。若ふたゝびがへる孝行の
威徳でめでたかりけり

□親は此子母へ孝行といふ事すへのことみだし。桜川
のさかりと三井寺のさかりと後先ちがへりとて筈
にもしぬ

△恋は此子の孝行といふ事は。此寺へ行しるしあるにて親を
たづぬるより。是なる物ぐるひの国里をたづねてあり
きとまで、それを孝なる心あるがゆへに悦びなり。

もし不孝なるば親と名乗るとも。狂乱（きちがひ）する女
なれば親とらるまじたり。もしれぐあるすを
せざるべきとうりみる者ありうりめぐりあひく。狂威
徳をあるべしうしめぐくんくんとたへ。桜川と云
井寺とたちぐくるものあるべしよ

七十七　安部宗任

○ちぐうれ在りたぬまでとゆぐたよるんとて
□親よ信ぬまでこのぴのぐまあしぞの字よもれで
はぐくなり
△逸言これ何のとの事ぞぞとうてはゆぐまぐぴとう

面べ物程とのぐまうしぐ

○はぐいくぴ川よ身とうぐげて
□親よてのぐはぐこうてうぐぴなりげつとすれぐ。
てのぐまうりぐ花さりぐ
△逸答うさうりれ逸言ぬ堂、ぐくあぐぴとな
とれしぐ。ぴはぐどりのう。琵巴（びわ）ぐ師う花紋（はもん）
体（ていし）ぐ行りてなるひあり。ぐるひなれそるこのつ
とうりぐ。てのぐまぐ花さりぐ

七十八　殺生石

○狐執（しゅう）ぐぴ世りぐ孫つくく殺生石となるく

□てんがうまし

七十九　芸形

○さてひとりの子のもとにまゐりてよりのち身をかくしてみぬ
ひまゐりてどもいつとなくまでゆきてをたゆへ。
唯ひとりありけへ

○みをもてはなせてえへども。色をもくれ身をたゝへ。
身ハ雑形ハ道よりもくゆ。毎日祈願といのんとたもひ
ゝ。さるがゝりのり

□雑よりみをつゝ付ざるをいひてゆ。嘉名どゝふもと
いふ。かゝのことをいるゝべぬ物也。さてもくゆりひと

△無芸とのゝ

ゝ月までほどをゝりゆ。又色をとゝめてハ身をたゝへ身へ
雑形ハ芸よりおくゆ。さてハ何にても芸をせゝ
無芸ゝひとをゝたけゝるの雑。無芸例して如初
又ハそゝるの月をゝかゝれまゝゝ長とゝ係氏の
ゝもてもゝんハゝざるゝ。寄引ゝゝ月
終おゝ遠かりゆよ色をとゝめてハ身をたゝへ身雑形
ハ芸よりゝとゝ何をゝ芸をせゝとゝ会ゝゆゝと
いゝすかゝゝ色をゝ家よりとゝ動てハ身よりゝ。
身ハゝをゝくも幸若をして毎ハ者を芸ゝとの
深切ゝ何ゝり。色をゝも者をゝ者よりとめ動く

源とともに出家せられぬ。あはれ哥の心ぞ、なりぬるかの八歳をぞ、ものなりし

八十　稚児

○ものうきものとこそ、やいざ、ちごぼうし、松陰に、旅居して。

凡そうとはく寅の時、祢の若をもまちて、八年

□雅は老松、昔の稚児三歳、桐のそこひ、同年のまり

ひとつれづさ、なりや、作者の心、あるべきなりぞ。通盛

乃さりをあつひの上と、同年なり。百歳にて、ものとも

ある事はくるとも、同事いはれまじきなり。ふ

いとこしらんん

△遊芸は、八幡と、敦盛門の、久目一事と、雅しるあ

そびひとつ、ひとつ、ひとつ、世アビ、命ゴテ、ひ家

ぞ、り

八十一　五節

○夏やあざやかの、蓮乃、多くへどく、孔子のなげた、園

孔や、五節、ぬ、や

□雅は、五節乃、ひとつ、ひとつ、垢、ひとつ、孔

節、ぬ、さとりすぐ、ひとつ、ひとつ、乃

△遊芸ありつれば、よとまりうれべ、芸姫の。

物ごとあつかひをしたりしかども世じてあつかひをしてさきのまてのつぬものなれど煩惱のあつかひをとくとりさらねばにんぐ〳〵どく物にんの苦はれ身をへぬあつかひのつぬものゝ。きさきなどものこんなやうなるやうにてこそ今までべこされいるものとなりて居るまてこそ後れ又是はいひをれり

八十二　拒諫

○ひとやうなるの中り物にたいしてはいかるものうけがたしし

□難しとは云ふ歌にはのうるとをけ〳〵

△逆言いふもしたがうをけてこそ〳〵べ何あまり

てなやくしぶやまと云ものゝまひしまてこそ

○よさうりなどの中り物にたいして人〳〵に礼義まあてんせんとて撰ひこれを出

□難しとは云ふ物にて家〳〵出るぞやいふ武士なれどとて酒盛礼義などにこそひろへ事あるや

△逆言礼義なれどへ也成なるものべこそひさどしてかるものとこそあれども今はこれ異なれば物〳〵りどなどにこそ也なるーたこそとたかひでこそ〳〵川なるひへ物の奥にて肩よりそと

為何そまことのようひさこと死物なれどもやりあと
のハをさげるるるもしぞまさあるものどもをそぶそうこと
てづりんとるもとがるハりんぶりぶりうぶりあり
なるのあり。三重撫燒まてハ孔雀のへぶとと
ふあるる襲と爺ようちうもてぬられこべ一段半
しうりんとなる

八十三　山燒

□親よ親世流の名手ましてハ世女のおらんを山燒と
いうあり。とまふ京ちうの名人美ぶよ百ノ燒
とつをとてハぬいせりてれ事あり

△西瓜いづきしてを用と耳とあるものハを差別と
ハ中ようけありの名色ぬとのグ笠ぶあづうあで
○くぐうぐうぐ何乃洞よとうや抱とすれば
□親よ何のぬぐさ孔雀ちうやれ今ようちり
△西瓜ぐあよりぬとやのるよ乃ぶうるるるさ
○ぬぬ　都沈とうちハ何ぬぐや　西瓜沙のぐ

八十四　水室

○親世ぬうあ　今まよ乃ハ不ぐあうもの
まてハいうるるかまハふりまあまて抜れ消ぬ
いれをくりぬりぬへ

□雅は大臣の口より民にむかひてやすくへかよしといふ所ぢ
めぐはちからすてけとへりんぶんなり
△遊言上よりごくびとの字儀をさしぬくなり

八十五　鵜飼

○鵜世はまべど鮎ぞ出でたり
□雅は春のかすみの字鵜かやし
△遊言にはあはとやごとく意ぞ代とあそびしくしく鳴

八十六　雑波

○梅しざくれ後来しておもきかふ
□雅はしそとへるは何事ぞや

遊言におきへ字なくしてもこそといふ文法呼應(ぶんぽうこおう)のご
としぱらくよくこそとへるは了限うたがあり

八十七　経を

○いでらけくささ婆やさん
□雅は常の經をきりあひかくるとやべくれぱもとの
四句の文(もん)をとらへてさらしむる所へ經てこさる世やさん
とりかまてよし
△遊言　經(きやう)のひさうハ二子偈(よくかい)因已前の佛なり。經の經
すひさる四句の文(もん)と。とくろでさうをかとりかるし。
經(きやう)と流りかりの。經述(がうじゆ)するべなやぶんありとせしあるべし

○笠寺のうらふかさを孤雲の上なるわや。雪見原

迎と義月の哉とゝや

□雅よ山やの字をゝびて春をまつ

△無言やれ字の美をゝ[illegible]ぐ[illegible]ゝく如雪

八十八　宝家

○今はまゝ山上へ成て式部紀を見せで出

さゝれどを

□雅よ自然の作にゝり。雅よ式部紀とたゝせ

らて知ゝ。但ゝゝいとねびしくとゝてのあの

らゝやゝゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

△無言いつゝをおぬゝの塩乃宮風ゝ[illegible]

ゝゝやゝよ名のゝしゝ[illegible]ゝ式部紀

雅ゝとゝたゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝ新世ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

八十九　中嶺

○ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

□雅よ花ゝてゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

うるはあらんとて行
△廻言等を異〻増減しの詞ばかり略如之例
てきるべし

九十　長家

○新世目録にまでなるべくまりこの分ぞ。廻言
を加へられ
□雅りよびらまてへとあるぞ
△廻言のあるやうぞやとぞれとゝへどそれはこゝとも
いれねばなるぬと必ずしるあを入てり。是もあを
らんとくあれば上よりやうなを入ねばとさいて。字

くゝとゝどして雅ぞひろされるゝ
もあるぞ。廻とせぞくなぐて。和をとくぬぞどくく
歌枕とれば〻られるぞ。ぞるしみあれとありと
るゝんゝなられと。是ぬとあるこそあれ
るゝなるぞ
○新世目録あるれば命をとりこへるぞれば
ゝゝ一編とぞ世ゝ度との会新しては
□雅よ清命をゝすりぬへりとをねべ三ぬを世ぞ
△廻言行るゝとゝも是やあるを加へりもゝへりも
同じ義ぞ。行ぞ義を世ぬぞゝくまいそれるし

九十一　梅枝

○富士山仮とのうのようつくゝ深石安うゝどゆかりひ。
梅づとあやまつてうゝせめ

□羅よりてみくちびひうりゆづをあやまつてうち
さりといとねべ角尾そろうどゆ角さうゝどゆのにの
ゆをを蓋なり

△逸義うちそるとうつゞさとうゝせぬいひそるさ
の蓋と出さやゆ所あたのまと入さることたうひさ
てゝ幽玄紙のうゝだびひゝゆんてむゝれいゝどの
ゞゼいられ恨うてそうゝの蓋とおのゆうゞうさ
の文法廣ゆ丸西ゝゆさうるちびでいれりうゝう

九十二　當麻

○新世自紙尚麻の曼陀羅乃いれ番はあゞうゝ
□羅ゝ抑ひまんゞうとゆいとゝひゆうれどもゆん
だうゆりゝゆゆ細茎の糸深ゝゆ抜ゝゆゝゆく
丸ゝりまでゆ。ゞいうれうれうゝりやうゝど
△逸義はゝゞどや抑の新ゝよ。ゞはのうゝうひうねを
角てとうゝゆよ口ゞ濁水ゆまあ茎丸糸と。ゞとてゞ
て法ゝ人の丸丸　口ゞまうゝひとゆゝとゝは。ゞひさての
上毒角ゝくゝゆゝ蓮の糸極ゞ丸乃帰丸てぬさ

よそは先さへましらふ花の気へたとも何の見る身とおもん
色つくぞみすまんずう織し菫の糸は見るぞこれが
目よかんてぬぐ思へれど此をねて蓮は糸のことへすること
かくのく拵といふり入まんずうありしやうこくさ
れ右大臣よりの息女は中将姫と時乃帝へ廃
帝天皇乃御宮とくうるぐうくりしぬりくりありまり
菫の糸は見かりしおもや家人そぞめそめて
まてあるべし

九十三　彩風

○みなもとは阿波の浪ぞくるる梅くらつあり　無菊初烈ぞし

○御身の敵を打よまし由を相撲するる附
□雛よ高時上臈れるなし先家の事ぞし
△延喜文保二年立後醍醐之子護良為東宮時不聴遂立後二条院子邦良為太子ト云ふるくて儀式にはくらうんとあるよ上臈もかじこともあるぞ。
何ぞなしといふやおく物とみんぬとて

九十四　蝶丸

○人はよくにまじりて雲井は更にも成らひさせて。
□雛よ宮どもれとの字なかれども人よ。ばうひやう
をちとぬ作ちんと見へたり

△廻言とうく文のかとちゝぬ鞠(まり)とんてんとり。面うゝげ
てゝてさ色んゝ人ほさんまづゝねうへよゝおまろさん
帝殺をさんもまうひさてとゝふるうり。毛井の
宇ゝ帝殺のすぞ。合点ゞまゝうゝまづゝ

九十又　志賀

○神ゝざうりつゝ山人の蓑(たさぐ)れ斧(をの)乃形さ自色
□雖よ蓑の斧といひをさゝるもゝ斧れなゞたとひ
うけゝ何事ゞや
△廻言蓑ハ斧うて攝(こう)拍とゝふうをとゝふてまた
ゝゝ寺結(さゝとく)やゝゝいひをのゝ生ぶゞさよとたゝ

たのみをよ作ゐて中ゝ寺ゝ命ゝとゝ

九十六　菖蒲

○えづうゝゝゝ

とゝて深夜さゝ山さうよぷとゝへで夜ハまぢ
雪すぐゝあけそめて。そのゝづゝふ月ぬぐゝん
とゝあ面を。何ぬとゝいひゝゝ。雲ハ天ゝりぷづゝ
き何ぬとゝくゝよゝつゝく。何乃天よぬどゝんとゝひ
きゝとゝいゝんぬ仏ゝりぷゝつゝさ。ぬ性ゝかゝ梅ゝんや。
ゝやこれゝゝハ乃てゝを花。一町のゝゝゝてゝりとゝ。
いづゝことゝふゝゝゝぐゝゝゝ。ゝゝゝずゝこれゝゝとゝゝぷぬぐ
ゝへゝゝぐゝといゝふゝものぐゝ。ぷぬづゝへゝてゝれゝゝ者

九十八　二人新

○仏福一寺の門徒ぐゝさ歌毋流ゝ。ゝゝ云ハゝぐゝし

△逸義何ぐゝゝゝて何ぐあゝゝゝ

いへで廬(ろ)より来ぐ〜の出て吳春草〜ぐれる。
ぎゆわ〜さあり奇特なる

□雜(ぞう)よりくもくくたしさるのり。放生門と月
てらん八幡をたてりるるゆらん八幡を月て放生門
とつりしるや。吳春草〜どるのげゆわ〜さなる
さぐくうれと河ぐるゆ春方よりもちうぐぐれ
をもさ後うで邪(じゃ)ゆもべし。春方たゆ衣(いしゃ)ゆ
れれ事るれぐゆまり粮(ろう)藉(せき)なるうとぐゆりゆ

△逸言ぐめり雜ぜるゆ老れと吳れと移ゆと
の三歩乃ゆれるひれを河ぐ〜通巡のさりを

あゆひのうへのさりと河ぐ〜とれらん八幡と放
生門とれ河を河ぐ〜いづまもひるつよ逸言いるそ
ゆるぐ〜ぐうをとるあけさるゆ安ひ〜ぐれら
ゆをあゆひのよゆうて放生門をたてりるよゆ〜ぐ通
れるをゆるぐよて去るへぐ
吳別如看月千里幸相思　李太白
今夜武別月圓中唯独看　杜子義
あゆ乃へを

月ゝとぢくさりて出し梅の花の
人もやちひ独めゝとゝ舞
とゝゝなりこれまゝゝ三人うれをみこれを
みて涙まるものもあるあをあゝ波の上の
うれゝけどゝ乃ぞわこのぐの別あるまい
ぐゝ。梅ゝざやとぐりあくされておくせそなく
乃さてもくれゝさるものの報恩なるとぞふ
ゝゝ雑云せゝ高ゝゝ又これ百ゝ信してれゝぐさは
推量あれゝ高ゝゝ高ゝゝのせるをみぐりは難せゝ
あゝゝおぬゝれ報恩とゝゝ乃百ゝ信

して報恩なり。これ乃なるおそろ乃又育なるまり
おこりてのゝゝ山れるゝひゝまりか
ゝゝ雑さとはくまび雑ゝゝ葉をあゝゝあゝひゝれ
で葉ゝまゝすゝ拍ゝ。業徳ゝれゝいたゝ服とた
てらゝれ朱子ゝ敵ゝる陰象山存命のゝちい
ゝゝゝゝゝゝその象山死して後。朱ゝれいゝく憂獨
一告子とのゝ面ひぬゝゝ見ゝゝ仏会ぬ我傷と
ゝゝれゝれゝも。利欲野早のゝゝを不ゝあゝび。
乃乃さまゝゝげをいくまゝゝみてれとく両羅ゝく

唱　下ノ巻終

187
3
266

明治三十六年八月廿五日印刷
同　年八月廿日發行

京都市上京區二条通御幸町西入
訂正兼發行印刷者　檜　常之助